

キリンビール福岡工場

生産現場の
Diversity
ダイバーシティ



重筋作業はハンドクレーンを導入し、ベテラン作業者の身体的な負担を軽減

ハンドクレーンで負担軽減

ビールと、缶チューハイや缶カクテルなどのアルコール飲料（RTD）を一緒に製造できるハイブリッド型ラインを強みに持つキリンビール福岡工場（福岡県朝倉市）。IoT（モノのインターネット）や人工知能（AI）を駆使して効率化を図ったことにより、男性が育児休暇・介護休暇を取得しやすくなった。一方、人手による作業が残る工程においても新規設備を導入し、高齢の作業員も働きやすい環境を整えた。

キリンビール福岡工場は5月から前川製作所と連携し、ビッグデータ（大量データ）による設備管理と、IoTを活用した冷凍機の遠隔監視に乗り出した。冷凍機に振動計などのセンサーや、ネットワークカメラを設置して設備異常の兆候や故障発生を防止する。年間約120時間の業務低減につながった。

同工場は、掃除しやすい底部傾斜のコンカルタンクを採用している。また「原材料の袋開けから自動計量、タンク投入作業についても大幅な自動化と省人化を実現済み」（高橋伸夫工場長）だ。

こうした取り組みの結果、男性も育児休暇・介護休暇を取得しやすくなったという。浦田有永エンジニアリング環境安全担当部長は6月に2回目の育児を5日間取得した。「周りの理解が進んでいる。仲間に助けられながら就業し続けられる」と笑顔をみせる。

ただ工場のすべてを自動化できるわけではない。年間製造能力25万キリ、敷地面積約55万平方メートル、国内最大の同ビール工場には大小さまざまな搬入・搬出物がある。2年前に重量物の運搬を補助するハンドクレーンを導入。フォークリフトと組み合わせながら、再雇用で高齢の従業員も楽に作業ができるように工夫

高齢の従業員も楽々作業



カメラを取り付けた冷凍機。センサーも付けて遠隔監視することで設備異常の兆候をキャッチ

した。作業現場では労働安全が一番大事との観点から、物流工程などを委託しているパートナー企業の8社・230人に対しても安全教育を実施中だ。

3月にはキリンホールディングス主体の「生産物流安全プロジェクト」が始動した。技術者が各事業所を訪問して

情報交流し「互いの安全レベルを高めている」（上原浩二シニアスタッフ）という。社内外の区別なく多様な人材が安心して働ける環境づくりを進める。

（西部・大塚久美）

ポイント
装置産業のビール工場は一度止まると復旧までに時間がかかる。稼働停止を避けるため、新たなテクノロジーを積極導入する。稼働の安定性向上と効率化を図りつつ、働きやすい職場環境づくりを進める。